



福島放技ニュース

THE NEWS OF THE FUKUSHIMA ASSOCIATION OF RADIOLOGICAL TECHNOLOGISTS

2011

11月10日号

128
VOL.

発行所 社団法人 福島県放射線技師会

〒960-8003 福島市森合字蒲原16-7 TEL/FAX 024 (659)1043

ホームページアドレス <http://fart.jp/>

巻頭言

チーム医療



副会長 遊 佐 烈

平成22年4月のチーム医療の推進についての厚生労働省医政局長通知を受けて我々放射線技師も変わりつつある。民間では放射線科医不足によりマンモグラフィや透視に対して放射線技師がレポートを書き医師の読影補助を行っているとの話もあるが、放射線科医が常駐している施設においては放射線科医の信頼が得られなければこの読影補助は難しい問題である。同じコメディカルでも看護師は少しずつその業務範囲を広げつつあるようだ。

そんな中、甲府市立病院で腎臓病の検査を受けた15歳未満の子供84人に対して日本核医学会推奨投与量を超えるテクネチウム99mを医師に無断で投与したとして放射線技師が医師法違反で捜査されているという。成人に対する日本核医学会の推奨投与量は最大185MBqで、15歳未満に対しては年齢によって量を減らすことになっている。しかし、技師は医師に相談せず、15歳以下の患者84人に対して成人に対する推奨量を超えるテクネチウム99mを投与し、年齢に応じた投与推奨量の10倍を超えた子供が41人いたという。全身の内部被ばく量は最大で180mSvが予測される子供もいるという。

福島県内では子供の内部被ばくを恐れ、他県に移り住んでいる事が報道されたり、「放射能・被ばく・汚染」という言葉に敏感になっている矢先のニュースである。3.11の東日本大震災による原発事故による放射性物質の拡散、住民の避難、各県から放射線技師が福島に来て避難住民のスクリーニング等を行ってきた事が知られるようになり、更に市民公開講座を開催したりする事でいままで以上に我々の職業が知れ渡り、認められるようになってきたと思っていた時にこの事件が報道された。我々放射線技師はALARAの原則 (As low As reasonably Achievable) 「合理的に達成可能な限り被ばく量を低減する」という事を習ってきたはずである。彼はどこでそれを忘れてしまったのであろうか。技師の言い分は「きれいな画像を短い時間で出すため」との事らしいが何が事実なのかは判らない。年齢ではなく体重で量を変える事が多いようで、15歳といえども大人と同じ体格をしている者もいるから簡単に責められない部分もあるが、やはり大人と子供の放射線に対する感受性の事を考えねばならず、検査効率を上げる為に独自の判断で行ったとするならば、やはり放射線技師としては許される事ではない。

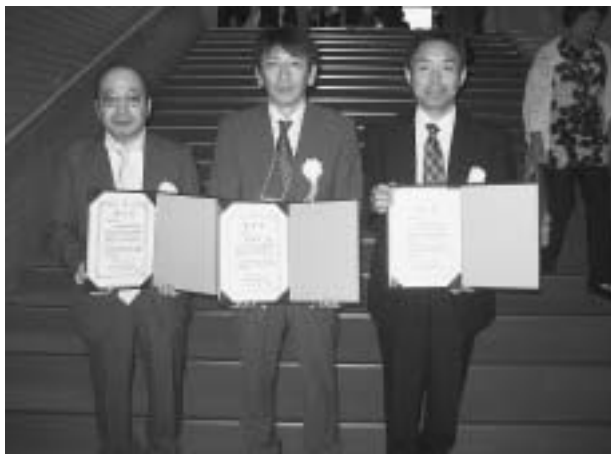
本来なら医師の責任の基、年齢・体重・体格等を判断して量を決定し、注射してくれればよいのだし、注射する前に測定し適正量であるかどうかチェックすれば良いのだが、技師を信頼して任せている所も多いのも事実である。小さな子供の場合は直ぐに寝てくれれば良いが、簡単に寝ない場合は待っている間に減衰していく量が気になるのは理解出来るが、その結果として量を多くして良いという理由には決してならない。それこそチーム医療として医師にも病院の検査体制の責任があるし、スムーズな検査を行うための方法はそれぞれチームで考え、患者のために、医療従事者にとっても良い方法を考えるべきであった。もっとチーム医療を行うためのコミュニケーションを組織全体で行い、二度とこのような事で報道されないように我々放射線技師もチーム医療に率先して意見を出して行くべきである。

「第27回診療放射線技師総合学術大会」 「第18回東アジア学術交流会」開催される

第27回診療放射線技師総合学術大会・第18回東アジア学術交流会が青森市文化会館にて9月16日(金)～18日(日)にて開催された。その中で7月16日に逝去された鈴木憲二福島県放射線技師会会長に特別功労賞が授与される事になり、御家族が壇上で中澤放射線技師会会長から手渡された。



本県会員で永年勤続三十年表彰として公立大学法人福島県立医科大学附属病院 佐藤孝則氏と財団法人太田綜合病院附属太田西ノ内病院 新里昌一氏 福島県立会津総合病院 平塚幸裕氏の三名が受賞された。



故鈴木会長に「瑞宝双光章」授与される

福島第一原発の爆発に伴う災害に、連日、福島県災害対策本部に日本放射線技師会現地対策本部長として詰め、県民の放射能除染活動と、全国から応援派遣された放射線技師の方々への対応に、日夜奔走中に突然死された鈴木憲二会長に、没後叙勲として瑞宝双光章が授与されました。

去る10月24日、県保健福祉部 緑川政策監が自宅を訪れご遺族に伝達されました。



第2回理事会議事録 (抄)

日 時：平成23年8月26日 午後6時～

場 所：県立医大放射線部カンファレンス室

出 席：(副会長) 斎藤康雄、遊佐烈、(理事) 佐藤靖芳、今野広一、佐藤政春、白川義廣、平井和子、嶋田峻二、古川義一、菅野和之、渡部育夫、新里昌一、堀江常満、(監事) 片倉俊彦、(事務局) 伊藤陸郎、阿部郁明

欠 席：(理事) 佐藤佳晴、渡辺和夫、小松一文

議長に遊佐副会長、議事録作成人に浜支部(今野広一)を選び議事に入る。

議題1 第27回診療放射線技師総合学術大会事前登録券及び情報交換会事前登録券の返却分の回収について

・ 前回の理事会で9月16日から青森で開催される第27回診療放射線技師総合学術大会の参加促進を促すために各支部へ配布されていた事前登録券の進捗状況について、各支部からの報告を受けた。

事前参加者ならびに事前登録券番号との照合を行い、照合結果については大会事務局に報告するとともに、各支部で処理できなかった事前登録券については、回収し大会事務局へ返却することで了承された。

議題2 各種講習会開催状況（X線CT認定技師指定講習会・フレッシューズセミナー）について

診療放射線技師基礎技術講習X線CT検査 東北地域（宮城県）の報告

- 8月20日、21日に仙台市で開催されたX線CT認定技師指定講習会の受講者数102名内福島県からの参加者は12名であった。講習会終了後、日本放射線技師会X線CT検査技能検定3級の試験が行われ、9月5日に結果発表が行われる。

また、今回の受講者については平成24年3月4日に宮城県で開催予定されている日本X線CT専門技師認定機構が実施する平成23年度X線CT認定技師になるための認定試験を受ける受験資格が認められる旨の報告が堀江理事からあった。

診療放射線技師のためのフレッシューズセミナーについて

- 日本放射線技師会から要請のあった、新規診療放射線技師を対象としたフレッシューズセミナーについて前回の理事会で承認された技師免許取得3年以内の県内の該当者はアンケートの結果約95名程度となる旨の報告が堀江理事からあった。

報告を受け、開催場所、開催時期について審議した結果、開催場所については郡山市内の施設もしくは県立医科大学の施設で調整することで了承された。

開催時期については、開催1ヶ月前には日本放射線技師会へ申請書を提出することより11月中旬以降の開催で調整することで了承された。

セミナーの資料等の作成作業のため事前に参加者人数を把握し、技師会に入会していない各支部の新人への周知を図るため、各施設長あてに開催案内を通知することで了承された。

議題3 その他

2011リレー・フォー・ライフの開催について

- 2011リレー・フォー・ライフは伊達で開催されるが、福島県放射線技師会として今年度は、支援協力の形で応援していくことで了承された。

30年表彰および50年表彰について

- 日本放射線技師会から30年表彰および50年表彰の該当者について照会がきた、該当者については県技師会事務局から書類を郵送する旨の説明を受けた。故鈴木会長の功労賞および瑞宝双光章の受賞について

て

- 故鈴木会長が第27回診療放射線技師総合学術大会で功労賞を受賞される。さらに、死後叙勲で瑞宝双光章授章について官報に掲載されたとの報告があった。

東日本大震災の活動記録を文書で残すことについて

- 東日本大震災ならびに東京電力福島第1原子力発電所事故に伴う県内の被害状況ならびに事故後の技師会の活動内容について会報にまとめて掲載し記録

に残してはどうかとの斎藤副会長からの提案があった。

総務企画が中心となって、各支部からの原稿を斎藤副会長が集約し、編集広報委員会が担当することで了承。

ホームページの会長挨拶について

- 福島県放射線技師会のホームページの工事中になっている会長挨拶の取り扱いについては、斎藤副会長と遊佐副会長との連名で挨拶を掲載することで了承された。

福島県放射線技師会会費納入免除申請書様式について

- 福島県放射線技師会の会費納入免除申請については、福島県様式の申請書を各支部長宛に早急にメールで送ると同時に日本放射線技師会の会費納入免除申請書および福島県様式会費納入免除申請書の集約については会長代行として遊佐副会長宛に郵送することで了承された。

訃報

本会名誉会員伊藤尚治様（二本松市安達町）は、去る10月7日逝去されました。（享年94歳）。
謹んでご冥福をお祈りいたしますと共に、会員の皆様に報告いたします。



特集「緊急被ばくスクリーニング報告」

県立会津総合病院 中央放射線部 渡部 育夫

2011年3月11日に発生した、東日本大震災に伴い、翌12日に福島第一原子力発電所事故を受け、避難住民の緊急被ばくスクリーニングを開始することになりました。

会津地区においては、3月13日各医療機関において受



診者についてのスクリーニングが開始され、続いて避難者に対するスクリーニングについて問題となり、各関連機関との連絡を試みたが、携帯電話等が不通となっており、Eメールにて各方面とのアクセスを試みた。夜間になって会津若松市より数名の避難者のスクリーニング要請があり、会津若松市公民館（旧学鳳高校）体育館にて、初めてのスクリーニングを開始しました。この時、GMサーベイメーター1台、シンチレーション1台にて実施、被検者27名内2名が放射能汚染有り、この時点で除染レベルを把握しておらず、とにかく汚染部位の洗浄を実施した。

翌14日の朝から数名のスクリーニング希望者が当院に現れました、その後対策本部が会津保健福祉事務所に設置され、対策本部の要請により当院車庫（会津総合病院）にてスクリーニングを開始した。

開始時点においてGMサーベイメーター1台、その後5台に増やす事ができたが、被検者があつという間に増え760名に上ったため当院診療放射線技師9名と看護師の応援及び保健福祉事務所職員にて夜間まで対応した。この時点で避難所に入るためにスクリーニング済証が無いと入れないという噂（後に事実となる）が広まり、スクリーニング済証を会津保健事務所長名で発行する事になった。小雪の降る中、乳児を抱えた方、妊婦さん、お年より、体の不自由な方も、長い方で6～7時間待つ事になり、本当に辛い思いをさせたと感じた。

この日は、特に南相馬からの避難者に汚染が多く見られ、最大26,000cpmの汚染を検出するに至り衣服の交換をお願いする事にしたが、交換用の衣服、靴、等の準備が間に合わず、長時間待機してもらうことになった。



15日は、14日の混乱した状況では当院のスクリーニングの受け入れできないと言う事になり、会津大学の一室に場所を移し1,650名のスクリーニングを実施したが翌日の3時近くまで掛かった。前日同様、寒さの中長時間の待ち時間強いることになり、避難者の皆さんには大変辛い思いをさせてしまったと思っています。

又、検査側も、交代要員も無く、狭い部屋でのスクリーニング活動となったためバックグラウンドも非常に高く



なってきた中で内部被曝のリスクも高く、非常に劣悪な環境での対応となった。

スクリーニング活動をしている中で避難者の25,000cpmの汚染も有り除染作業を行ったり着替え等を実施した。また一部の避難者のマスクからは、数千cpmの汚染があり、小児、妊娠可能な女性については、積極的にマスクの交換をお願いした。

16日は、前日の反省を受け、受付を17時までとし、福島県放射線技師会、支援チームからの応援も得る事ができたが、依然避難者の数が多く1,350名に達し、スクリーニング待ち時間の改善は見られたもののやはり寒さの中、



長時間の待ち時間を強いることになった。受付時間を過ぎてからのスクリーニング会場への来場者については、翌日に回ってもらうことになり若干の混乱はあったが、避難者からの理解は得られたと思った。

17日からは、場所を会津ドームに移し、会津地域の他病院からの応援も受けることができ、受付、待機場所、スクリーニングブース、除染、更衣テント等の区域を別けたルートも確保でき、案内も就けることができた。

これにより動線がスムーズになり、スクリーニング効率は向上し1,691名の避難者について実施した。13,000cpmを超える汚染は、見つからなかったが、特に小児については、数千cpmでも、積極的に着替えをお願いし、大人については、洗濯、ふき取り等をするよう説明した。

18日からは、多くの診療放射線技師からの応援を得る

事ができ、1,152名について実施した。最高20,000cpmの汚染を検出したが、全体としてはサーベイメーターから検出される測定値は低下傾向にあり、前日同様に着替え、洗濯等について説明しながら実施した。スクリーニング自体はスムーズに運んだが、寒さが厳しく被検者、従事者共に厳しい日が続いた。

19日は、654名で前日同様に実施した。4月に入って、被検者の数も落ち着きを見せ始め、4月4日には、100名を切り、この頃になると一時帰宅立入者のスクリーニングが増え、中には5回目と言う方もいた。スクリーニング対象も、持ち出した衣類等、多義におよんだ。

数件が、食品等の依頼もありこれについては、厳しくお断りをした。又、車についても依頼は有りましたが、会津のスクリーニング規模では、混乱が予想されるため、洗車をお願いするに止めた。

毎年、福島県原子力防災訓練には交代で参加していましたが、今回は、予想を超える、避難者の規模と汚染レベル、ガソリン不足、携帯電話の不通、着替えの準備不足、天候、除染設備、何よりも測定器（GMサーベイメーター）の不足と言ったあらゆるマイナス要因が重なった中での実践となり、我々にとっては、本当に貴重な体験と学習をする事ができた。

しかし、現在も収束の見通しも立たない中、多くの方が避難し、劣悪な作業環境の中、収束に向けた作業に従事している方、本当に大変だと思います。一日も早い復旧を祈念しております。

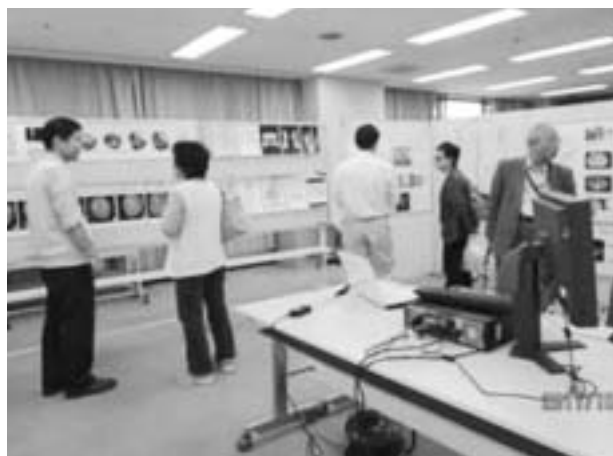
支部だより

県北支部

「福島市主催「健康フェスタ2011」開催される

去る10月25日、福島市保健福祉センターにおいて福島市主催の「健康フェスタ2011」が開催された。

今年は、「みんなですすめよう！健康づくり ～からだ、こころ、免疫力アップ 私たちができること」をテーマに保健医療福祉等の関係団体が参加して開催されました。



放射線技師会県北支部は「最先端医療画像への取り組み」をテーマに参加いたしました。当日は各施設の最新画像（CT・MRI・DR等々）や動画、技師会所有の啓蒙パネルを展示、来場された方に検査方法などを聞いていただき、安心して検査に臨んでいただけるようお話しさせていただきました。また、原発事故に由来する放射線への不安や対策等の質問を数多く寄せられるのではと思っておりましたが、それもあまり聞かれず市民の方々は放射線に対して、冷静な対応をされているのではと思いました。

全体の来場者が810名と例年になく少ない中、県北支部のブースには200名を超える方においていただき盛況のうちに終わることができました。（佐藤靖）

浜通支部

「第13回いわき地区画像研究会」開催される

8月30日(火)午後6時半よりいわき市立保健センター多目的ホールにおいて、第13回いわき地区画像研究会が開催された。今回は震災後、はじめての研究会であり「東日本大震災における各施設の影響そして、その後」というテーマでいわき市内の5施設からの発表があり、また、これらの施設におこなったアンケート結果の発表もあった。

これら発表の前に富士フィルムR Iファーマ株式会社造影事業部 流 俊介氏より「非イオン性造影尿路・血管造影剤イオプロミド注（FRI）の紹介」があった。

続いて、総合磐城共立病院 佐藤 龍一氏より「東日本大震災における各施設のアンケート報告」があった。今回の震災ではライフラインや食料の確保、各医療機器の故障に伴う修理、津波や原発事故の影響など、どの施設においても思うようにことが進んでいかなかったことが報告された。

続いて5施設からの発表があり、各施設共に地震発生後初期には入院患者の食料確保に紛争し、人海戦術で病室まで食事を運んだとの報告があり、また、職員勤務体制の整備や職員食料の確保などさまざまな課題が発生しひっ迫した状態がうかがい知れた。また、4月11日の余震の影響も部分的ではあるが甚大であり、施設内の棚が倒れるなど3月の地震よりも影響があったとの報告もあった。（鈴木）

「第14回いわき地区画像研究会」開催される

9月1日(木)午後6時半より総合磐城共立病院第1会議室において、第14回いわき地区画像研究会が開催された。今回は「福島第一原発の影響（広野町における）」というテーマで富士フィルムR Iファーマ株式会社 千葉工場長 岡崎富美夫氏より講演を賜った。

岡崎氏は千葉工場長ではあるが、富士フィルムファインケミカルズ広野工場が縁で広野町の依頼により除染活



動を行っており、毎週、広野町を訪れていると自己紹介があった。

講演は爆発事故直後の放射性物質の飛散状況から始まり、現在の空間線量、道路や土壌の汚染状況、食物の汚染状況が実測値を用いて具体的な説明があった。また、除染については稲ワラを使って安価な除染ができないか模索しているが、放射線量が30%減に留まりこれからの課題であるとの説明もあった。(鈴木)

「市民フォーラム・救急医療いわき2011」開催される

9月3日(土)いわき市総合保健福祉センターにおいて「市民フォーラム・救急医療いわき2011」が開催された。



いわき市病院協議会・いわき市医師会・いわき市が共催、福島県放射線技師会浜通り支部も後援し毎年開催されている。

今回の特別講演は「福島 嘘と真実 いわき市における放射線衛生上のリスク」と題して、高田 純教授(札幌医科大学)



が講演した。会場はすぐに満席になり、入れなかった市民の為に準備した第2会場、第3会場が満席になるほどの大勢の市民が訪れ、講演を聞き入っていた。この後、いわき市消防本部による心肺蘇生・AEDの基礎知識、救急隊員による心肺蘇生・AEDの実技体験が行われた。(今野)

市民公開講座「2011 いわき乳腺疾患フォーラム」開催される

10月10日、「2011 いわき乳腺疾患フォーラム」が市民公開講座として、いわき市保健福祉センターで市内の医療職団体との共催により開催されました。

今年のテーマは「みんなで乳がんについて考えよう」と銘打ち、セッション1では「乳がん体験者の声 アンケートから見えてくること」と題して、緩和ケア認定看護師の講演がありました。アンケートの設問は「乳がん治療を市内の医療機関で受けていた、受けている。」などアンケートの回答から見えてきた患者様の現状、悩みなどをお話下さいました。無記名のアンケートということもあり、我々、放射線技師が通常の業務では知りえない患者様の本音も聞けて今後の業務に生かすことが出来ると思いました。

セッション2では、聖マリアンナ医科大学 外科学特任教授 福田 護先生をお招きして「乳がんを早く見つけて治す 私たちの取り組み」と題して講演して下さいました。

乳がんの疫学から始まり、乳がんの最新治療までお話しください、興味深く拝聴致しました。

福田先生は、NPO法人 キャンサーリボンズも主催しておられ、乳がんに限らず、がん患者様全般の「治療と生活」をつないでいられているようです。

3連休の最後の日で、天気も良かったので、市民の皆様が気になっていたようですが、日頃のピンクリボンの啓蒙活動が浸透してきたのか、多くの市民の皆様がお集まり、関心の高さがうかがえました。開催にあたり、ご協力頂きました関係各位の皆様、ご苦労様でした。(共立 村上)

編集後記

3月の地震から早半年以上が過ぎ、しかしながら未だに「放射能」の話題は尽きず、新たに続々とホットスポットが見つかる始末。食品にも放射能濃度が表示されるなど、なにか数字ばかりが一人歩きをしている感がある。だが、この姿こそ日本人の偽らざる放射線問題への関心の高さなのだろう。(森谷)